

【作文】 中学生の部 最優秀賞
人権を守る大切さ

双葉中学校二年 山上 さくら

「お母さんが病院で働いていることは学校で絶対言わないでね。」
コロナ感染が流行り始めた時、母は私に言った。その時の母の顔は
とても悲しそうで、今でも覚えている。患者さんのために働いて、い
つも生き生きと楽しそうに仕事をしていた母にとって、自分の職業
を隠さないといけないのはとても辛いことだろうと思った。

今は、感染者数が増えてコロナに感染するのは珍しくなくなった
が、感染流行初期は医療従事者というだけで、差別をされる時期も
あった。あの言葉は、私が医療従事者の娘ということで、心ない言葉
をかけられて傷つかないようにと思っただけの言葉だったのだと思う。

「そんなことで差別する方が間違っている」そう思っていたが、世
間の声は冷たいものだった。陽性者は嫌がらせを受けたり、ネット
で個人情報さらされたりした。息をひそめてそっとその時をやり
過ごすことが、傷つかない最善の方法だった。

先の見えないウイルスへの恐怖から、誰かを攻撃して安心し、誰
かを思いやる余裕もなかった。マスクや消毒液、トイレトーパー
ーなどが店から消えた。今では考えられないが、みんな必死だった。
死を身近に感じた自己や大切な家族を守るためには、他人なんて関
係ない。その考えは否定もできないし、一定の理解もできる。誰だっ

て自分が一番大切で、愛する人を守りたいのは当然だ。でも、それが
誰かを傷つけていい理由にならない。

ワクチンや薬の開発が進み「今は誰が感染してもおかしくないよ
ね。お大事にしてね。」と優しい気持ちで相手を思いやる人が増えて
きた。そんな世の中の流れになったことが私はすごく嬉しい。今思
えば、母の職業を隠さねばならなかった行為は、世間が作り出した
差別だった。目の見えない、得体の知れないウイルスが作り出した
恐怖が、多くの人々を巻き込んで長い間支配した。

この出来事がきっかけで、人権について調べて気づいたことがあ
る。世の中には、私が思っていた以上の差別の種類が存在していた。

職業差別の他に、人種差別、児童虐待、高齢者差別、障がい者差別な
どこの世界中には国はちがえど、どこにでも差別はおこっており、
被害者も加害者もみんな同じ人間であることだけは紛れのない事実
だった。

人権とは「すべての人々が生命と自由を確保し、それぞれの幸福
を追求する権利」というが、生まれながらもつ当然の権利が尊重
されず、同じ人間同士で傷付け合っているのが現状だ。本来なら守
つてくれる存在の親からも平気で傷つけられる。小さい命がぞんざ
いに扱われている。調べれば調べるほど多くの不合理な問題に胸が
締め付けられたと同時に、自分の人権への意識の低さが情けなかつ
た。当事者にならないと、本当の悩みや苦しみを完全に理解するこ
とは難しいだろう。しかし、当事者が抱えている問題を知ること
で、今まで無関心に過ごし、どこか他人事のように捉えていた問題への

意識を変えることはできる。当事者の声を聴くことで、気持ちに寄り添うことができるのだ。間違っても発言の機会を奪うことはあってはならない。

いつの時代も差別を受けるのは少数の弱い人達だ。その時代で、いわれのない非難を浴びせられ傷ついた人達がいる。そんな中でも、声を上げて戦ってきた人もいる。誹謗中傷を受けても負けずに、後世のために道を切り開いてくれた先人達がいる。自分と違うことを異なるものと捉えて攻撃するだけの考えはもう止めよう。必要以上に構えたり、遠ざけようとするのではなく、その特性を知り、共存することが私達が進む本来の道ではないだろうか。未知が恐怖を生むのなら私は知ることとその恐怖に立ち向かいたい。優劣はない。みんな同じ人間だ。歩み寄れない訳はない。誰かが安心するために、誰かが我慢して傷つく世界は間違っている。誰かの犠牲で成り立つ世の中になってほしくない。無意識に他人を傷つけることがないよう、私は自分の権利も、他人の権利も尊重できる人になりたい。

【作文】 中学生の部 優秀賞

知らない誰かへ

柏原中学校二年 澤 礼彪

みなさんは、ヘアドネーションを知っていますか？ヘアドネーションとは、小児がんや脱毛症など、さまざまな病気や不りよの事故などがかみの毛を失った子達のために、寄付されたかみの毛でウィッグなどを作り、無償でプレゼントする活動のことをいいます。

ぼくも小学五年生の時にヘアドネーションに参加したことがあります。参加した理由は、二つあります。一つ目は、知人が脱毛症になったことがあると知ったからです。その知人は、脱毛部分が治ってきたと思ったら、別の場所が脱毛していき、最初は黒染めスプレーでかくしていました。しかし、脱毛部分が広がっていき、スプレーで手に負えなくなってきた、常にフードのある服を着ていたそうです。そこで、たどり着いたのがヘアドネーションでした。色々調べたところ、通常三十一センチ以上の長さがないと出来ないけれど、その団体では、十五センチから寄付することが出来て、知人のように困っている人がたくさんいることを知りました。

二つ目は、ぼく自身が支えん学級に在せきしていて、先生やクラスのみんに助けてもらうこともあり、そんなぼくでも人のために出来ることがあるならやってみようと思ったからです。ぼくは、小さなころからかみの毛が長く、結んでいたもので、かみの毛を伸ばす

ことに抵抗がありませんでした。同級生たちからも、かみの毛が長いことでのいじめられたりすることは全くありませんでした。でも、外出先でトイレに行った時に知らない人にじろじろ見られたり、「ここは男子トイレや！女子トイレに行け！」などと何度も怒鳴られたことがあります、嫌な思いをすることもありました。でも、どんなに嫌な思いをしても、かみの毛を切ろうとは思いませんでした。それは、ヘアドネーションをするためと、かみの毛が長くて結んでいるほうがぼくらしいからです。家族も、「かみの毛が長いほうが礼彪らしい。」と言ってくれています。

そんなぼくが一度だけ、かみの毛をすごく短くしたのが、ヘアドネーションです。ぼくは、肩甲骨辺りまであったかみの毛を、寄付する長さを少しでも長くしたから思いきって短くしました。その時は、はずかしさもあったけど、うれしい気持ちのほうが大きかったです。夏休み中に切ったので、新学期みんなに笑われたりしないかドキドキしたけど、みんなおどろいていたけど、いつも通りにしてくれていたのが安心しました。

ヘアドネーションのウィッグを一つ作るのに、約三十人分のかみの毛の寄付が必要です。ヘアドネーションは、かみの毛を染めていても、パーマをかけていても大丈夫です。もちろん、国籍・性別や大人・子どもも関係ありません。長さを守っていれば誰にでも出来る活動なのです。知人のウィッグも、こうしてたくさんの方が協力してくれたおかげでプレゼントしてもらえたんだと思うと、すごいなと思うし、ぼくのかみの毛も知らない誰かのウィッグになっている

と思うと、ヘアドネーションに参加して良かったと思います。

世の中には「ヘアドネーションは意味がない活動」などの声もたくさんあるそうです。でも、知人のようにヘアドネーションという活動のおかげで笑顔になれる人が、たくさんいるとぼくは思います。寄付と言うと「お金」のイメージが思いかぶと思いますが、「お金」ではないけれど、子どもでも、たくさんの人を笑顔にすることが出来るステキな活動があることを知ってもらいたいです。

【作文】 中学生の部 入選

言葉とふれあい

大東中学校三年 平居 海七

社会をよりよくするためには、言葉の重さを知ることとふれあいが必要不可欠だと思う。私がそう感じるようになったのは、ある一つの出来事からである。

私が中学二年生の時の話だ。その日の私はいつもより一段と暗い気持ちで学校へ行った。なぜ自分があんなに暗い気持ちだったのかは分からないが、少しストレスがたまっていたのだと思う。学校についた後も気持ちは落ち込んだままだった。そのせいか、小さなミスが重なり、下校するころには肩に重りがずしりと沈み込んでいるような気分だった。下校している最中は、今日ダメだったところを思い出し、一人反省会をしていたのを覚えている。そんな時だ。前方に背中をまるめて歩いているおばあさんがいることに気がついた。あいさつをしようか迷ったが、そんな元気がないから、とおばあさんの横を通りすぎようとした時、おばあさんが私に向かって笑顔で「おかえり」と言ってくれたのだ。その瞬間私の肩に沈みこんでいた重りがふわっと軽くなった。「おかえり」という言葉に優しく抱きしめられているような感覚だった。私はおばあさんに言葉を返してないことに気がつき、慌てて「ただいまです」と言った。するとおばあさんは笑顔で私に小さくえいしくして、また道を歩きはじめた。さっきまでとても落ち込んでいたのがうそのように明るい気持ちに

なった。

以前、ニュースか何かで聞いたことがある。言葉には大きな力がある、と。まさにこの出来事と重なるのではないだろうか。あのおばあさんにとっては何気ない、日常の中の言葉だったのかもしれない。しかし、その言葉で私は救われたのだ。言葉にはそれほど力があ

るのだ。
そんな言葉だが、人を救うこともできる反面、人を傷つけることもできる。いじめや誹謗中傷がいい例だろう。

言葉を発する側は、自分が発言したことを忘れているかもしれない。だが、言葉を言われた側は、何気ない一言でも案外覚えているものである。言葉というのはそういうものである。私たちがもつ言葉の重さを知っていけば、おのずと一人一人が人を傷つける言葉を使わないと思う。

社会をよりよくするためには、ふれあいが必要だが、単に言葉がかわすことだけではない。会話の中で、相手を気遣う優しさや自分の感情を伝える表情が必要なのである。あたたかい優しさや表情でするふれあいは、きっと社会をよりよくするだろう。

私にとって、あのおばあさんは私を救ってくれた、私に言葉の重さを教えてくれたあこがれの人である。私もあのおばあさんのようになりたい。たった一言でも人に優しさを向けられる人になりたい。言葉の重さを理解していて、相手とのふれあいの中に優しさを感じさせられる人になりたい。そんな人になれるようにがんばろうと思う。